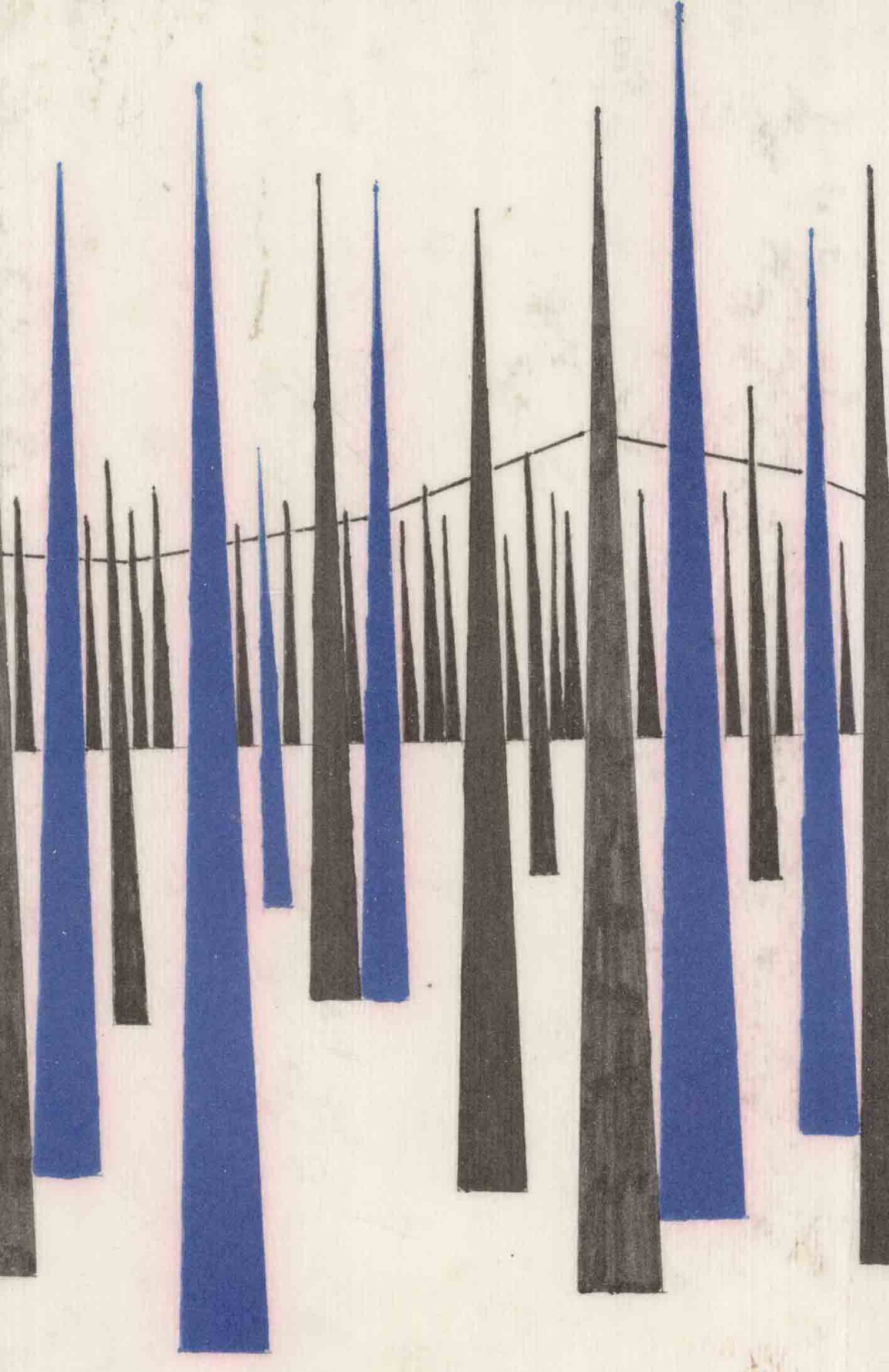

# 狂人日記

irokawa takehiro

色川武大

福武書店

色川武大（いろかわ・たけひろ）
一九二九年、東京に生まれる。東京市立第三中学校中退。六一年、「黒い布」で中央公論新人賞受賞。七七年、「怪しい来客簿」で泉鏡花賞受賞。七八年、「離婚」で第七九回直木賞受賞。八二年、「百」で川端康成文学賞を受賞。著書として他に「宍」「生家へ」「遠景雀」「復活」、また阿佐田哲也の筆名で「麻雀放浪記」などがある。


狂人日記

一九八八年一〇月一五日　第一刷発行
一九八九年一月三〇日　第六刷発行

定価一五〇〇円

著者　色川武大
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒一〇二　電話(〇三)二二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　大日本印刷
製本　小泉製本
平版印刷　栗田印刷



（落・乱丁本はお取替えいたします）

©T.Irokawa 1988



ISBN4-8288-2282-8 C0093
NDC913 194 256p

# 狂人日記

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

木造の長い廊下を渡り、堅い扉を開けて貰い、お辞儀をしながら中へ入った。両側に小さな扉が並んで居て、右側手前から三つめが、第二棟B13、即ち今日からの自分の部屋だ。四つの木札の末尾に自分の名が書いてある。同室者にひきあわされ、すぐその足でまた扉を開けて貰い、長い廊下を医局の方に引き返す。レントゲン検査、心電図、注射、呑み薬のたくさん入った袋を貰う（何の薬か）。洗濯挟、洗剤、煙草、塵紙などに金を使う。そのうえ自動販売機で氷アズキ喰べる。冷たい感じが身体を刺激して気持いい。

スケジュール、6・30起床、7・15〜50朝食、服薬、9・30まで自由時間、12・00〜50昼食、服薬、3・00まで昼休み、レクリエーション、4・45〜5・50夕食、服薬、6・10まで自由時間、9・30消灯、就寝（一般）、10・30まで、勉強（特殊）消灯、全員就寝。

睡眠時間が合わなくて困る。しかし周囲を窺っていると、皆、勝手なときにごろごろしていて、さのみ規則にきびしくないようだ。但し、消灯後は灯をつけにくい。

字を書くと、書いた字が二重に見える。押入れ式の段ベッドに横になっていると、網戸のそばの生暖かい空気が静かにすべり流れて、部屋の空気と交わっているのがわかる。気分すぐれぬ。しかし、病院のせいではない。病院は、自分のいかなる状態にも関与しえない。

煙草のせいか。煙草がいけないのか。だが、吸う。そのわり睡眠状態良好。どこか緊張しているせいか。

血液採取、体重測定（61kg）。茶器とか歯をみがく道具など入れる箱。洗濯物の処理の仕方。グリーン色宇宙型をした蜘蛛。

午前中、医師と面談。医師の判断を待つまでもなく、面談の間おかしな言動に至らず、大体自分は人前で我を忘れるということがめったにないから、ただ会話しているだけではなんの判断も生じるまい。そこまでうちとけて話してもいない。とはいえ、ただいまのところ狂疾が人見知りをしてひっこんでいるだけで、自分はいうところの正常人乃至健全人ではない。自分の頭脳はこわれている。その実感は、今のところ、誰の判断よりも勝る。自分に関して云々できるものは自分しか居ない。自分に関する認識は、錯覚もあり、推定でもあり、都合に沿った甘いものでもあろう。答を出して片づくことでもなかろうし、さまざまに不正確でもあろう。にもかかわらず、自分のことを他の誰にも委ねる意志がない以上、自分の不安定な実感を抱えているより仕方がない。

我れから狂人という者は狂人にあらず、などというが、こんな言葉くらい当てにならぬものはない。それは昔、情緒が安定していて、人がより大きなものに律せられて生きていた頃の言葉だ。

狂人とは、意識が健康でない者の総称であって、千差万別、度合の差あり、また間歇的に一定時間のみ狂う者あり、部分的に一つの神経のみ病んでいる者あり、完全に正常な意識を失っている者などごくわずかだ。ほとんどは度合の差であるにすぎず、しかもその度合はレントゲンにもCTスキャンにも映るわけではない。もともとどこまでが正常でどこからが狂疾か、度合の問題がほとんどである以上、この線がはっきりしているべきだが、それも明確になっていない。

血管と脳髄に関しての病理学は、大正このかた進展していない、と医者はいう。進歩するのは手術の技術で、病理の方は、生体実験でも積み重ねなければ駄目との由。不思議な病気で、細菌もおらず、傷口もなく、ただ患者の様子を眺め、その言動から察して判定するだけのことだ。しかもごく少数の完全な、乃至は概念的なものに当てはまる症状以外は度合の問題であり、そこに個性が加わって千差万別になるのだから、ボクシングでいうTKO勝ち以外の判定のごとく、決定的な断はくだしにくい。

では、なぜ、病院に来、入院までしてしまうのか。

自分は、自分の頭がこわれているという実感を大事にしている。自分は医学の徒ではないから、こういう実感を証明してみせる必要はない。自分だけの問題としてその実感を抱いており、そうであるからには病院に入って（休むことができれば）休むのが適当と思う。その点、医者に

も厳格な判定がむずかしい病気であることが幸いして、狂疾の持主だと見せかけることもできる。

面談は当然のことながら、医者が質問し、自分が答えるという形式になった。自分というもの、乃至自分のこれまでの半生のうち、正確に答えられるものはすべて正確に答えた。そうして、質問が日常のなんでもないこと、つまり病状におよぶと、一段と慎重になって考えこみながら話したが、それは実際の自分のきわめて不正確な戯画にすぎなかった。しかし、自分は嘘をつこうとしたのではない。できれば自分というものを包み隠さず披瀝して、ともかく専門医である他人の判断を仰ぎたいところだった。けれど、限られた時間の会話で自分を伝えることのなんとむずかしいことか。言葉というもののむずかしさ。事例を選択し、そこに代表させて語らざるをえないし、そうすれば全経験の総合である自分とはかけちがってくる。医者はそうしたなかから実態の切れ端をつかんだり、勘ちがいをしたり、多少のずれを含んだ個性を感受していくだろうが、それが何かの役に立つのだろうか。自分としては、これだけ自分にかかわりあっている以上、短時間に自分の実態を示す表現の仕方を身につけなければなるまいが、特に自分のような無教養、かつ深い考えを持たない者は、そこに至ることがむずかしい。

読物で読んだ漠然とした印象では、患者の心奥に達する質問を医者が用意し、障害を生む源泉をみつけて、そこを集中的に攻める如くである。自分の場合は、それらの質問解答もただ不正確な自画像、その場の気持を投げ合うのみで、うまくはいかないように思うがどうだろう。それでも医者からその種の質問が出るかと思っていたが、今日のところは深入りしてこなかった。

「どうもやっぱり、自分のことをうまくしゃべれたとは思いませんね。先生に対して失礼なことですが、雑で不正確なことばかり申しあげて」
「かまいませんとも。私と貴方の交際はまだはじまったばかりで、こちらもそんな期待は持っておりません」
「他の患者さんでもそうでしょうね。おしゃべりの得意な人とは限りませんから、大変ですね」
「ええ、しかしいずれにせよ、資料にはなります。貴重な資料です」
医者はいそいで言葉を続けた。
「もちろん我々は資料を集めるためにこうしているわけではありません。私がいいたかったのは、長い時間をかけて理解し合いましょうということです」
「——長い時間をかけると、どうなりますか」
「どうすればどうなるとはっきりいえるものじゃないけれど、そうする必要はあると思いますよ。正直いって、我々の専門の仕事は、まだその程度の段階のところなのです。ですが、こうもいえましょう。世の中の大事なことは、たいがい、どうすればどうなるというものじゃありません」
「確かに、そうですな」
「たとえば性格の問題にしても、自分でひょっと気づいて、或いは他人に指摘されて、直せるようなことは、たいしたことじゃないので、生まれついてしまってから直すということは本当にむずかしいことですな。ですから人間というものは、三代も四代も、もっと長い時間をかけて根本

を造るつもりにならないといけないのでしょうね。それから、直すということもね」
「それでは、私の場合は、絶望ですね」自分は苦笑しながらいった。「私には、妻も子もありませんから」
　医者は改めてのように、カルテに眼を落した。
「意地のわるいいいかたにきこえたら許してください。私自身のことも含めて申しあげたのでね。しかし、貴方がお考えになるほど、我々は接近不能でもなさそうですよ。たとえば、貴方は昭和十年でしょう。私も昭和十年です。つまり同じ年です。昭和十年の生まれというだけで、実にさまざまの、共通の分母をかかえているわけですからなァ」
「ええ。私のおしゃべりなんかよりも、そういう基本的なものの方が、よくものをいうんでしょうねえ」
「私たちはお互いに同じ入口を通り、同じ年月を生きてきたわけですねえ」
「しかし、貴方は先生だし、私は患者です」
「わかる、ということも面倒くさいものでね。昭和十年生まれのところでわかったような気がした分だけ、その他の入口の部分に眼が行かなくなるということでもあるわけで、あちらを打てばこちらが飛び出る、ゲーム場によくある式の、あんなふうなことに近いんですね。ということは、わかりあうということがむずかしい分だけ、わかりあえないものでもないということでもありましょう。まァこれからちょいちょいおしゃべりし合っていきましょうよ」
　医者は机上のものを片づけながら、それじゃ又、といい、自分は立ち上って一揖し、失礼しま



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

す、といった。それから、
「今の気持に即して一言だけ申しあげます。私は、この病気、だかなんだかわかりませんが、こわれた自分を直していただきに、この病院に来たのではなさそうです。つまり、ただ、私は、休みたかったのだと思います」
「ゆっくりお休みください。それはとても大事なことですよ」
医者は微笑を寄越し、自分は笑わずに部屋を出た。彼の微笑はけっして不愉快なものではなかったが、遠いへだたりを感じさせた。医者も、いろいろと配慮してくれる他人なのだと思えた。もちろんそれが当然で、ことあらためてそう思うのは、あの医者に自分が一歩近づいたのかもしれない。
自分としては日頃になくしゃべって疲れたせいか、テレビのある部屋の椅子にかけてしばらく放心する。テレビの音声を伴奏にして、いつのまにかうとうとと眠った。それから部屋に戻り、洗面所に行って洗濯。
身体のすぐ横に、猿が来ている。じっとみつめると、横すべりして壁の中へ入ってしまう。しかし身体の横にまだ居る気配でもあるわけで、睨むと、やっぱり横すべりして行ってしまう。どうということはない。日常生活を遮断するほどのことがあるわけでもなく、自分が黙っていれば、無に近いことだ。しかし、他の人は、こういうことを黙っているのだろうか。どうもそういうふうに感じられることがある。口にして詮のないことをいう奴は、馬鹿、とまでいかなくとも、はしたない奴だと思われそうだ。自分は小さい頃からそのへんのことがわからなくて、人間

のふるまいかたというものをちゃんと身につけることができなかった。
夜、かなり烈しい発作がくる。もっとも、一人でじっとしているだけで、そのようにふるまわないから、同室の人が気づいたかどうか。
ふと気がつくと、遠くの方で和太鼓が鳴りだしている。はじまりはいつもそうだ。風に乗ってきこえたりきこえなかったり、そんなふうなかすかな音で、しかし気づいてしまえば耳の奥から消すことができなくて、世間というものの底にいつも波打っているリズム。幼い頃からの経験の重なりで、和太鼓の音とともに、生家の天井とうすぐらい電球が眼に浮かんでくるのだ。やがて太鼓の音にかぶさるように、ある気配が現われてくる。
それは音にはならない。天井やうすぐらい電球が地震のときのようにちりちり震えはじめる。心臓の鼓動の、どっ、どっ、どっ、というのもやはり音で、似ているがちがう。音無しのメトロノーム、音の気配のようなもの、けれども明確なリズムで、それは次第に速まり、勢いも増してくる。
どっ、どっ、どっ、どっ、
それが、いつか、
ど、ど、ど、ど、ど、
になり、同じく、
ど、ど、ど、ど、ど、
でも一段とスピードを増す。

しかしはじめと同じような、
どっ、どっ、どっ、どっ、
でもあり、焦げつきそうに急テンポの、
ど、ど、ど、ど、ど、
でもある。頭の中の空気の密度がうすらぎ、自分は穴の底に吸いこまれたようで、天井やうすぐらい電球や、壁や襖や仏壇や、視野の中のものがすべて、すうっと遠のいていく。音の気配は頭を叩くような音だし、リズムは全速力の汽車のピストンのように速い。自分は叫ぶ。きっとこれで気が狂ってしまうのだ。幼時から何十回そう思ったことだろう。リズムに耐えられない血管がもうこれで破れてしまうだろう。自分は必死で、何か思いついた言葉を口にする。世界を言葉のリズムに戻そうとするが、ゆっくりしゃべっても早くしゃべっても、しゃべり終ると、言葉全体が急テンポの流れの中に浮かんでいることを思い知らされるだけなのだ。自分は歌を唄う。これは少し効果があって、歌のテンポが生きている間、リズムの波は少し後退しかかる。もちろん唄っている間だけだ。唄い終れば、敵は前にも増す勢いで速度を早めてくる。自分は知っている歌を（声には出さずに）根かぎり唄いまくる。
身体をぎゅっと硬くし、汗まみれになっている自分にふと気がつく。そのままの姿勢で和太鼓がまだ鳴っているか、耳を澄ます。それが鳴っているとも鳴り止んでいるとも判断がつかない。
だがリズムの気配は消えている。自分の持物には、よかれあしかれおいおいと慣れてきていて、今ではかなりのものを手なずけているつもりだが、この発作にはいまだに慣れないのはどう

してだろう。
自分は苦笑いした。幾つになってもこんなことに全力を使わなければならない自分に呆れる。呆れかえるという気分は快い。できれば、絶えまなく、自分を呆れかえっていたい。

注射、打たされただろう――、と同室のAがいう。またちょいちょい打たされるよ。こうした病院ではね、患者が世話をやかさないように、気力の衰える薬を与えるんだ。つまり、去勢だよ。我々は去勢されて、どんどん衰えて、全然世話のやけない物になりさがるんだ。あんた、気をつけなあかんよ。
自分は無反応に黙っていた。Aは平気で、いうだけいうと自分のベッドに戻っていった。気をつけろって、どうしろというのか。
医局に行った帰り、看護婦にことわって中庭に出てみる。ときどき、突風のような風が吹く。それがいい。木陰に腰をおろして目前の芝生を眺める。かなりの時間そうしていた。幸せな気分になった。
視野が広いと寛やかな気分になる。緑という色も寛やかな気分にさせる。
ポット、灰皿、茶道具、茶、買い整えること。(字が二重になっている)
眼がとても衰えた。身体のどの部分に関しても衰えを痛感するが、特に眼がすごい。それに疲れると痛む。眼圧が高いのか。

二階24室の老人が、夜半、窓から脱走しようとして成らず、部屋の中に転落した由。老人は、手の届く普通の窓でなく、天井に近い明かり取りの窓から脱出しようとしたらしい。老人は兵児帯でベッドに結えつけられているという噂。

自分は、自分のこと以外に笑うことはできない。自分が退いている分、他人からも退きたいもの也。では、どうやって生きていくのか。

如何に生くべきか。そういうことを考える年齢では早くもなくなった。もう五十を越した。一生は短きもの也。このまま転げるように生き終えてしまいたいものだ。

敷布をとりかえに来た看護婦が、自分の名を呼んだ。

「いつも、寝つきがわるいんですか」

「寝つきはわるくないよ。でも、すぐに醒める」

「駄目よ、眠らなくちゃ。寝るのが一番楽ですよ」

「自分では、かなり眠っているつもりなんだが」

「病院は嫌いですか」

「いや――、嫌いじゃない」

「何故」

「――静かだから」

「そう。静かなのが、好きなの」

自分が同室の人と口をきかないので、間接に、同室者に弁解させたのか。それとも、健康管理

のつもりで、内向を溶かすために声を出させたのか。

午前、小発作あり。

身体がだるい。頭痛薬もらう。しかし、左の膝の上の筋肉が痛い。もう夏も過ぎかけているはずで、それでも夏風邪か。幻聴が、お前の障害はすべて薬によって作られたものといっている。

終日横になっている。赤貝の缶詰をたべる。果物がたべたいが売店で売っていない。熱のためもあって、水分をさかんに身体が欲しがる。もっとも、自分は強い薬を常用しているので、水をがぶがぶ呑むのはいつものことだ。入院前は、ポットで三つ分くらいの湯とコーヒーを、これだけは自由に呑んでいた。入院してから、忘れたようにあまり呑まない。緊張のせいか。洗面所に行くのが面倒なせいか。薬と小便の問題、小便も、離れたところに行くため、回数が減った。

幻聴しきり。多数の声で、地域単産と国労の問題について討議している。昂揚した声の主が、あと一週間で、全部開放するか、しないか、決定するというときにあたって、と叫んでいる。自分がはじめてきくような熟語がかなり出てきたが、気持のどこかにすごくいろいろのことがはさみこまれているものだと思う。

三回目体温37・6、四回目体温37・2。

大島さんと園子の声がきこえる。彼等の日常会話で、自分は聴きたくないが、身体にまかせている。



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com